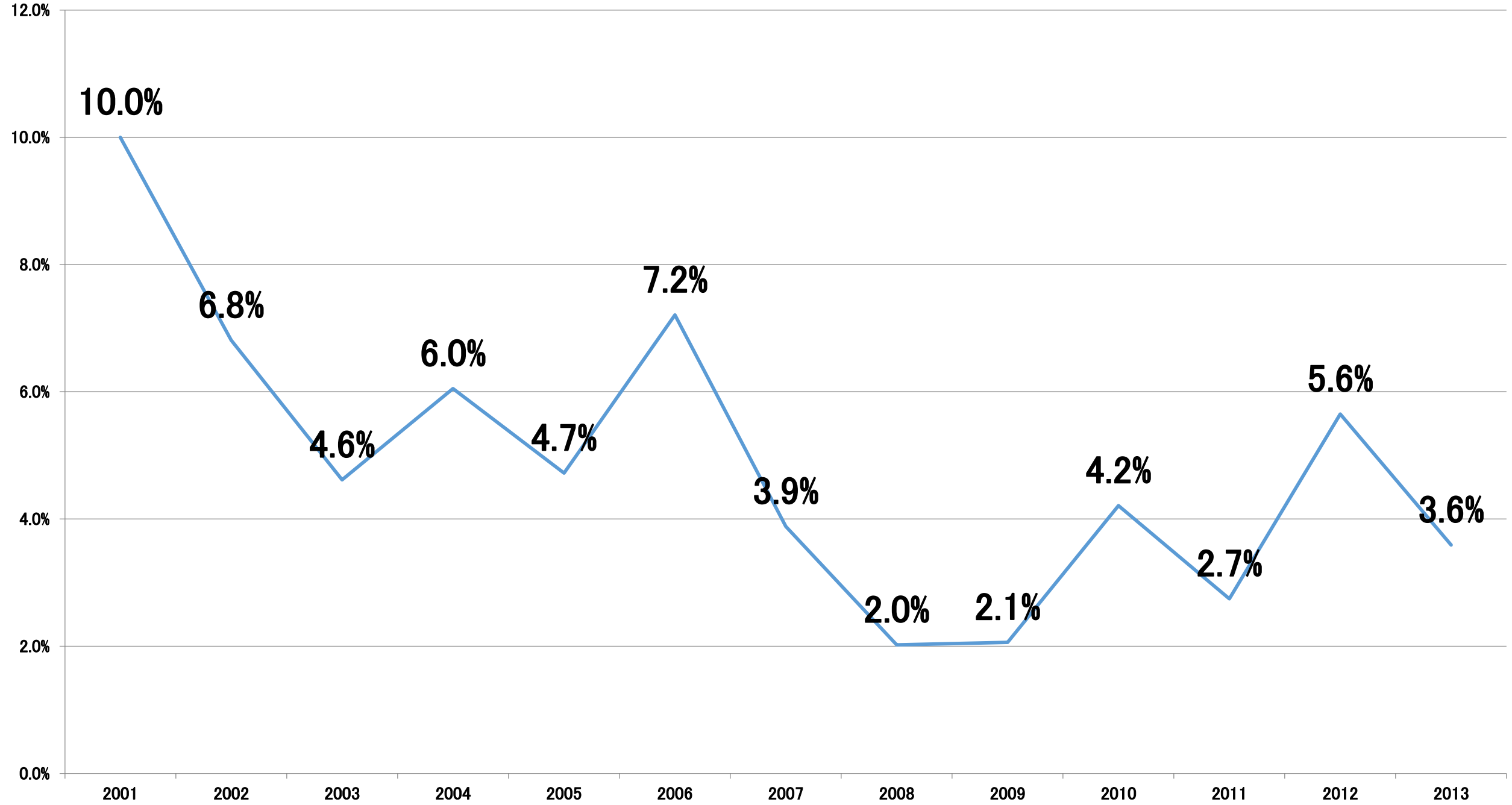
2020年に罹患率10万対10
を実現するために、考えられるシナリオ

STBJ　田中慶司

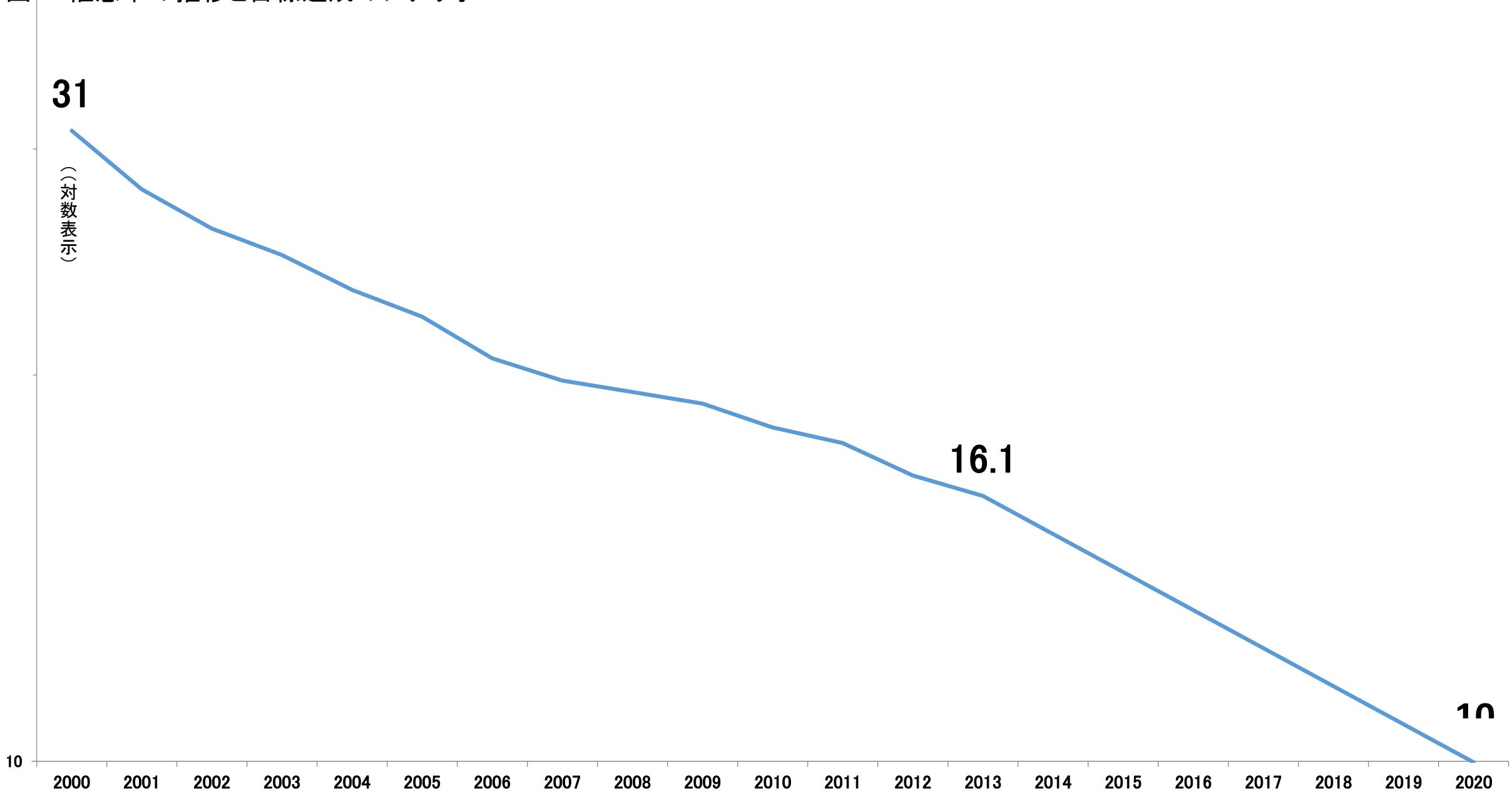
図1. 減少率の推移 (2000-2013)



過去の罹患率の推移

結核罹患率の年間平均減少率は2000年以降4.9%。
2000年から2005年が6.4%であるのに対して,
最近5年間は3.4%と減少率は近年鈍化傾向にある。
2020年までに10を達成するためには
罹患率の年6.6%の減少が必要

図2. 罹患率の推移と目標達成のシナリオ



年間6．6%減は、7年で8000人減となる

- 2013年の患者　20495人　10万対16．1
- 7年間
- 2020年に患者　12300人　　10万対10
  とするには、　8000人減らす必要あり

初感染からの発病の減

- 初感染からの発病は約3分の1（7000人）
- 自然減で、ARI　0．05%から0．04%に（年間3．1%）　なるので
  1400人減　（発病率は感染者の17%とした）

- これに加えLTBI治療の推進　　現在8000人を2万人に（患者1000減）
  接触者検診を塗抹陽性患者（8000人）一人に、3人のLTBI治療を目標
  （対策A）
- BCGはやめられない
- 医療従事者の感染予防の徹底　1000人を200減　　**（対策B）**

既感染者対策

- 既感染者は、2380万人　これから1．3万人が発病
- 2020年には1800万人に減少　単純に3200人減
- 同時に、発病のリスクの高い集団も減少　合わせて4割5200人減
  （0．055％発病している）
- 特に、発病リスクの高い既感染者の予知方法を検討　（**対策C**）
  第2？のLTBI　対策の検討

- 外国生まれは1000人　徹底した管理により　2割減　（**対策D**）

地域別対策

- AからDの対策を推進すれば、自然減と相まって10万対10の目標を達成できる可能性有り

- その他

  10万対10以下の県を増加させ、さらにその率を減少させる

  高罹患率の都市部の対策を検討

  10万対10以下の地域に、対策支援（研修、病床、啓発）

ここに引用した数値は、大森による「結核既感染者の推計」と、結核の統計2013に基づく。なお、対策にかかる数値は、あくまで目標として掲げたものである。2，3，4ページは、RIT　加藤による